2. 地域文化を作る設計者選定

2.1. 日本で行われたプロポーザルの成果

すでに述べたように、設計競技や設計プロポーザルには、能力ある設計者を競わせることを通じて、環境に潜んでいる可能性を顕在化させる効果がある。

しかしながら、戦後の日本の公共建築の設計者選定においては、これら設計競技が多数派であったわけではない。設計という全体の質に関わるものであっても、価格での競争を第一義とする諸制度との関係から、能力ではなく設計料の多寡で選ぶ入札が採用されることが多かった。その結果、先達から引き継いだ貴重な環境資源を毀損する事態も度々起こっていた。

そうした反省に立って、優れた建築や都市を創造し、地域文化を向上させる動きが20世紀の後半から各地で見られるようになってきた。その先駆とも言えるのが、1988年に熊本県が始めた「くまもとアートポリス」である。わが国では、この試みを契機に、いくつかの地域で試行が行われるようになっており、広島県による「広島型建築プロポーザル」はそのような自治体による取り組みの一つとして位置づけられる。

2.2. くまもとアートポリス

・背景と経緯

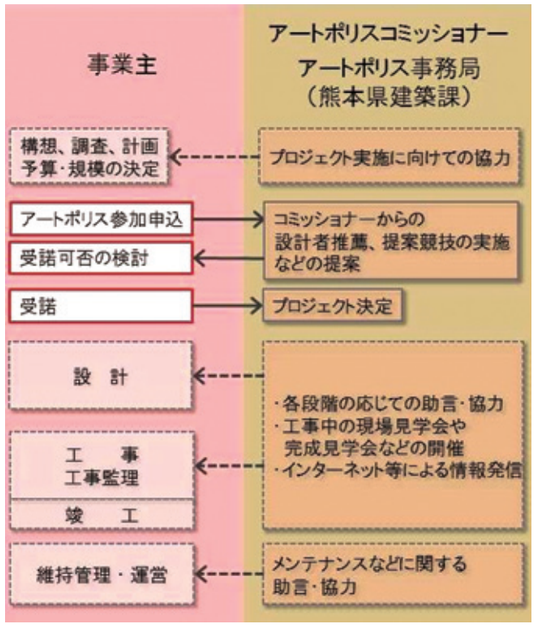
戦後、地域の個別性に配慮しない画一的な建物が建てられることで、地域の景観が本来持っていた魅力が失われる現象が、各地で起こることとなった。そのため、こうした状況を問題視し、地域に根差したデザインに配慮した建築を求める声が高まっていった。

'80年代は好景気で、公共建築が戦後の建て替え期を迎えた絶妙のタイミングでもあった。こうした中、熊本県において、建築の創造を通じて地域文化を再生し、地域の価値を創造するくまもとアートポリス事業が、1988年（昭和63年）に始まった。

・目的

くまもとアートポリスの宣言には、「熊本県は、環境デザインに対する関心を高め、都市文化並びに建築文化の向上を図るとともに、文化情報発信地としての熊本を目指して、後世に残る文化的資産を創造するため、『くまもとアートポリス』を推進する。」と書かれている。

この目的のもと、コミッショナーが国の内外から選んだ設計者を参加事業主に紹介するプロジェクト事業、イベント、広報事業等（企画・広報・人材育成事業）が行われている。



くまもとアートポリスの事業展開図

・事例紹介

熊本県営保田窪団地（竣工：1991年）

設 計 者：山本理顕設計工場　　敷地面積：11,184㎡
所 在 地：熊本県帯山１丁目28　　建築面積：3,562㎡
主要用途：共同住宅　　延床面積：8,753㎡

建築概要

この団地では従来の南に向かって整然と等間隔に並ぶ、いわゆる「団地型」配置ではなく、各住戸が中央広場を囲むように配置される形式である。この中央の広場は、110世帯全員の関係性の醸成を期待する交流の場として、専用の外部空間が大きく設けられている。また、各住戸は中庭や広いテラスを持ち、常に外部と接することができるようになっている。

県営保田窪第一団地（C／清島靖彦）

有明フェリー長州港ターミナル（竣工：1996年）

設 計 者：石田敏明建築設計事務所　　敷地面積：3,978㎡
所 在 地：玉名郡長州町長州字下原2168-22　　建築面積：586㎡
主要用途：待合所　　延床面積：976㎡

人・車・モノの流れを妨げることなく、人々が出会い、休息できる開放的な環境として計画されている。建物を護岸と平行に細長く配置し、周辺は隣接する公園と一体となるように緑化している。事務・管理施設を２層分の高さまで持ち上げ、その下にコンコース（1階）とボーディングブリッジ（2階）を納めることでスムーズな乗下船が可能となっている他、屋上へ直接アクセスすることで雄大な自然が眺望できるようにもなっている。

有明フェリー長洲港ターミナル（C／石丸捷一）

熊本南警察署熊本駅交番（竣工：2011年）

設 計 者：クラインダイサムアーキテクツ　　敷地面積：305.95㎡
所 在 地：熊本県熊本市春日２丁目　　建築面積：117.11㎡
主要用途：交番　　延床面積：143.62㎡

交通量が比較的ある交差点という敷地の特徴を受け止め、ランドマークにもなりる交番が目指されている。建築の外形は角の丸い三角形の敷地形状を活かしながら、警察車両動線や利用者のアプローチ、周囲からの視認性を考慮して決定され、表裏を感じさせない連続した景観となっている。時間とともに移りゆく色彩と建築とが混ざり合うことで、日々行き交う風景が豊かな表情をもってつくりだされている。

熊本南警察署本駅交番（熊本県）
出典：熊本県（https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/115/4547.html）

宇土市立宇土小学校（竣工：2011年）

設 計 者：小島一浩＋赤松佳珠子／CAt　　敷地面積：25,650㎡
所 在 地：熊本県宇土市高柳町104-1　　建築面積：6,160㎡
主要用途：小学校　　延床面積：8,570㎡

児童数800人を超える小学校の建替計画である。新たに開発したL字型の構造壁と開放式の建具の組み合わせで、伸びやかで開放的な教育空間が生み出されている。気候や教育的設定などによって様々な表情を見せるその環境は、子どもや教師が可能性を随時発見する主体的な学びの空間でもある。

宇土市立宇土小学校（熊本県）

大腸肛門病センター高野病院（竣工：2017年）

設 計 者：共同建築設計事務所＋コンテンポラリーズ　　敷地面積：12,119㎡
所 在 地：熊本市中央区大江3-2-55　　建築面積：3,684㎡
主要用途：病院　　延床面積：14,966㎡

アートポリスの趣旨に賛同して行われた民間病院事業。自然を受け入れ、人との交流を促す、地域に開かれた公共性の高い「ひろば」のような環境を実現するため、様々なスケールのガーデンやコミュニケーションのための空間を備える他、各ベッドが固有の窓を有し、患者が環境を調整できる「個室的多床室」、防災性・耐久性に優れた球面式すべり支承による免震構造など、医療施設としても高度な性能が獲得されている。公募型のプロポーザルによって実現した。

大腸肛門病センター高野病院（熊本県）

2.3. 群馬県における一連のプロポーザル

群馬県内では、1998 年から現在にかけて、20 件以上の設計プロポーザル事業が行われている。その中には、重要な建築賞を受賞したものも数多くあり、良質の建築の創出を通じた地域活性化の好例として注目を集めている。数人の県職員が自発的に始めた研究会が元となっており、制度化されているものではないが、学識経験者の協力を受けながら、情報公開、市民参加の導入などその時々で重要なテーマを柔軟に取り込むことで継続的に発展しており、ひとつの運動としての体を成している。特に、富岡市では、駅舎のプロポーザルを皮切りに、市内においていくつかの建築プロジェクトが連坦的に立ち上がり、市民を巻き込んだ魅力的なまちづくりのきっかけとなっている。

上州富岡駅（竣工：2014 年　設計：TNA（武井誠＋鍋島千恵））

上州富岡駅は世界遺産に登録された富岡製糸場の玄関口となる地方私鉄の駅である。軽やかに浮いた大屋根は富岡市の観光拠点としての門となり、市民の交流スペースとして開放的な半外部空間を生み出している。大屋根の下には街の身の丈にあった大きさの待合室やコンコース、情報コーナー等が点在し、縁側のような快適な居場所になる。建物は「鉄骨煉瓦積造」という新しい構造を考案し、製糸場の最先端追求の気概を継承した。凸凹しながら積まれた煉瓦壁はベンチや掲示板・間仕切りなどの駅舎に必要な機能を満たしつつ、同色の煉瓦は敷地を越え歩道や広場、駐車場へと連続してゆき、世界遺産の街へのおもてなしに相応しい駅前空間を創出している。　出典：GOOD DESIGN 賞 HP（https://www.g-mark.org/award/describe/41666）

富岡市庁舎（竣工：2018 年　設計：隈研吾建築都市設計事務所）

明治時代の日本の人の情熱を今に伝える世界遺産、富岡製糸場の街にふさわしい、ヒューマンで開かれた市庁舎を作った。鉄道の駅前、富岡製糸場へ向かう経路上にある立地を生かし、分棟型で、棟と棟の間を通り抜けできる、ストリート型の公共建築を実現した。「小さな屋根の集まり」としての分棟型建築とし、大きく張り出した庇は、日よけや雨やどりの空間としてストリートにやわらかさと躍動感を与えている。二重の勾配屋根の間に、通風・遮光の高窓をとる形式は、養蚕の街富岡に伝わる越屋根からヒントを得た。外装には、表裏で素材の異なるアルミと木をハイブリッドにしたルーバーを使用し、雁行するストリートを行き交う人々は、ファサードの多様な質感とリズムを楽しむことができる。

出典：隈研吾建築都市設計事務所 HP（https://kkaa.co.jp/works/architecture/tomioka-city-hall/）

2.4. かまいし未来のまちプロジェクト

釜石市立釜石東中学校 鵜住居小学校 鵜住居幼稚園 鵜住居児童館（竣工：2017 年　設計：小嶋一浩＋赤松佳珠子 /CAt）

東日本大震災で大きな被害を受けた鵜住居地区の教育施設の再生事業、津波にも安全な環境を早期かつ合理的に確保するため、土木と建築を一体で検討することによって、切土量を大幅に削減している。子どもたちの姿が町のどこからでも見えるとともに、発災時には避難場所となる高台の建築は、地域の復興のシンボルともなっている。

出典：釜石復興の軌跡

釜石市民ホール TETTO（竣工：2018 年　設計：aat+ ヨコミゾマコト建築設計事務所）

出典：釜石復興の軌跡

東日本大震災で被災した市民会館の再建計画。被災後の釜石市中心市街地に賑わいを取り戻すことが最大の目的。ホール A（838 席）、ホール B（218 席）、ギャラリー、練習室などからなり、震災復興を目指す釜石市民の文化的活動拠点として、多様な使われ方が想定されている。主な特徴は、①ガラス屋根の市民広場、②平土間にもなる木質系内装の大ホール、③広場に面し全面開放も可能な小ホール、④表／裏の区別なく館内を巡ることができる散策路、⑤格納式移動観覧席と大型建具により出現する大ホール／ロビー／小ホール／広場が一体となった総長約 80m の全天候型都市広場、などである。

出典：GOOD DESIGN 賞 HP（https://www.g-mark.org/award/describe/48025）

鵜住居復興スタジアム（竣工：2018 年　設計：梓設計、設計協力：新谷眞人、長濱伸貴）

ラグビーワールドカップ 2019 開催と地域の活性化を目的にスポーツ文化と防災教育拠点として整備計画された。

開催後の後利用時の施設負担も考慮し、最小限の本設と仮設で対応する計画としている。ラグビーの聖地・釜石と世界、市民、安心未来をつなぐ地域のシンボルとしてメインスタンドの屋根は世界に向けて羽ばたき・船出するしなやかで力強い思いを表すゆるやかにカーブしたデザインとしている。山と川に挟まれた自然の地形を活かしたセキュリティと動線計画により、観客席と広場をバランスよく配置した避難・退出のしやいスタジアム計画となっている。

出典：梓設計 HP（https://www.azusasekkei.co.jp/work/view/440）

出典：釜石復興の軌跡